

(報告書)

## オランダのコーヒー文化に関する会計史的研究 ーなぜコーヒーが選ばれたのか？ー

橋本 武久 (京都産業大学経営学部)

### 1. 研究目的

オランダ東インド会社 (1602-1799) の収益の源泉が、香辛料貿易にあったことはよく知られているが、同社は嗜好品<sup>1</sup>も多く扱っていた。それらは東南アジアのコーヒーや、イラン・南アフリカのワインなどである。しかし、この嗜好品貿易については、文化史的な観点からは相当数の研究があるものの、その取引の会計・商業的な実態についてはほとんど分析されてこなかった。そこで本研究では、オランダ東インド会社による嗜好品貿易がどのような規模で行われ、当時の社会・経済にどのような影響を与えたのかについて、会計学的一次史資料の精査を通して、その実態を実証的に明らかにすることを目的とする。

オランダ東インド会社 (Verenigde Oostindische Compagnie) に関してはこれまでも数多くの研究がなされてきたが、多くは歴史学プロパーの研究者によるものであった。これらの研究は会計帳簿も史料 (資料) としてはいるが、「会計学的視点」が欠如しているために、その問題点を十分に明らかにできていなかった。

無論、会計史研究者による研究もあるが、それらは、オランダ東インド会社の繁栄と衰退の原因究明や企業統治の観点に立ったものが主流であった。特定の商品勘定、嗜好品に関しては、主要産品であった胡椒など香辛料に比べて、歴史プロパーの観点からも、会計史家の観点からも十分に検討されてこなかった。

実際には、嗜好品もまた東方貿易における重要産品であったと考えられる。香辛料貿易で繁栄を得た同社は、その終盤期には、嗜好品貿易で躍進したイギリス東インド会社に追い上げられ、抜き去られ、ついには解散に追い込まれたのである。その後、植民地経営を引き継ぎ財政改革に乗り出したオランダ政府は、コーヒー、茶、たばこ、そしてワインの強制裁培制度を導入したオランダ領東インド (ジャワやモルッカ) で莫大な利益をあげた。つまり嗜好品は、巨大企業の盛衰を決する要素であり、かつ国家財政をも左右する主要な産品であったのである。

そこで本研究では、特にワインの商業史に精通する野澤丈二氏 (当時・帝京大学、

---

<sup>1</sup> 嗜好品の定義としては多様性があるものと考えられるが、本研究では「嗜好品とは、栄養や薬効を目的としない飲食物をさす。コーヒー、茶、スイーツ、酒、たばこが代表である」(小林編 2020, 7) に拠るものとする。

現・早稲田大学)を共同研究者とし、オランダ東インド会社が扱ったコーヒーとワインという二つの産品を中心に、これまで別々に研究されてきたこれら嗜好品の生産と貿易の実態を会計的視点から比較・分析する。そして、これら嗜好品がいかにして文化的、社会経済的な関心の対象となってきたか、時代とともにどのように変化してきたのかを明らかにする。

さらに、人間が生活するうえで必要不可欠とはいえないこれら嗜好品がなぜ、東インド会社という、一国の政府をも凌ぐと言われた巨大な存在の存亡を左右するまでに至ったのかを、会計学という実証的視点から考察し、そもそも人類史において日用品とは、嗜好品とは何か、という根源的な問いにまで踏み込みたい<sup>2</sup>。

## 2. 研究方法

本研究助成申請当時の当初計画は、次のようなものであった。

- ① 文化史や貿易史などの周辺分野の先行研究成果（論文等）の収集。
- ② コーヒーに関するあらゆる先行研究のデータベース化と内容の検討。そして、それらの意義と限界を措定し、本研究の課題のブラッシュアップを行った上で、追加的に収集が必要な資料を特定する。
- ③ 研究の遂行に必要な追加の資料の収集。
- ④ 追加資料を基に本研究課題に対する検討を行う。
- ⑤ 成果報告書の作成を行い、本研究の結論、ならびに今後の展望を明らかにする。

すなわち、本研究は、「国内での基礎調査」「オランダおよび欧州各国での資料収集・分析」、および、「資料の解読・分析」の3段階からなる。

第1段階では、国内の国立国会図書館、大学、公共図書館等において、オランダ東インド会社によるコーヒーの栽培や商取引に関する先行研究・文献の収集を行う。集めた文献資料をデータベース化するとともにその内容を精査し、先行研究の意義と限界を明らかにしする。そうして、本研究課題の意義に沿って分析の方向性をより先鋭化し、海外でのみ入手・閲覧が可能な（デジタルアーカイブ化されていない）資料のリストアップを行う。

第2段階では、資料リストに基づいて海外資料の収集にむけてその範囲と対象を絞る作業を行ったうえで、橋本がオランダ（Nationaal Archief）とイギリスへ出張し、各国の国立公文書館などで対象史料の閲覧・収集を行う。

▶ *Inventaris van het archief van de Verenigde Oost-Indische Compagnie*

---

<sup>2</sup> なお、2019年より始まったいわゆる新型コロナウイルス感染症の拡大の影響で、研究計画を修正（および延長）せざるを得なくなり、本研究は申請者が担当したコーヒーに関するものを中心として行い、野澤氏からはその都度助言をいただくこととした。

, 1602-1795 (1811), アーカイブ番号 1.04.02 (オランダ東インド会社全体の資料)

4967-4977: Bevoorrading van het schepen (船の備品)

7143-7168: Journalen van de opperboekhouder 1700-1796 (帳簿係の記録)

- Inventaris van het archief van de Nederlandse Factorij in Japan te Hirado [1609-1641] en te Deshima, [1641-1860], 1609-1860, (平戸・出島商館に関する資料) アーカイブ番号 1.04.21

第3段階では、資料の解読・分析を行う。そして結果を総括し内容をまとめて成果報告を行う。本研究の結論を明らかにするとともに、本研究の意義と限界を確認した上で、今後の展望を明らかにする。

なお、中間報告会における審議員からの「会計帳簿資料を基に嗜好品の位置付けを明らかにする」ようにとの指摘事項に基づき、研究計画及び内容について若干の修正を行い、周辺分野および先行研究成果（論文等）の収集を継続するとともに、共同研究者との定期的な検討会を継続的に実施することとした。

また、研究代表者橋本は、17, 18世紀のオランダ東インド会社の会計資料や簿記書から、同社におけるコーヒーの位置づけを検討する。そして、コーヒーは嗜好品であったのか、そもそも、当時における嗜好品とは何か。また、オランダ東インド会社にとってコーヒーとは何だったのか。オランダ文化に与えた影響の根源は何かについても検討を行う。

そして、これらの基礎研究と現地調査を統合することができれば、文献と実際の帳簿資料との比較研究も可能となり、その結果、コーヒーをはじめとした嗜好品が、オランダ東インド会社という巨大企業の盛衰を決する重要な要素であったことを明らかにできるものと考えた。

しかしながら、前述の通り、研究計画にある訪問先のヨーロッパ各国におけるコロナ禍の再拡大のため、現地調査の見通しが、中間報告会を行った2021年8月末時点より混迷の度合いを深め、2022年2月以降にずれ込んだことから、研究期間の延長を申請し、研究内容をネットでの資料検索と収集、そして、これをもとにした文献史的研究を進めていくことで新しい知見を得ることに努めた。

とくにオランダでは、オランダ東インド会社に関する一次史料を中心に、関連する分野の文献を調査する予定であったが、コロナ禍による海外渡航が制限されたため、海外出張を2023年2月に実施し、オランダ東インド会社の本店が置かれていたアムステルダムを会計帳簿を中心に調査と分析を行い、また、イギリスにも出張し関係資料の収集を行った。

### 3. 研究成果

前述の通りコロナ禍の影響を受け、現地での調査が行えない中、文献研究やオンラインで閲覧やダウンロードが可能な史料をもとに以下のような様な研究成果を得た。

#### (1) オランダ共和国成立以降の同国経済におけるコーヒーの位置づけ

ここでは、「オランダ共和国経済について書かれた書物の中で最も浩瀚なもののひとつであろう」<sup>3</sup>とされる、J. ド・フリース他（2009）を中心にオランダ経済史上におけるコーヒーの位置づけを概観する。

オランダにおいて「茶やコーヒーが広く受容されるようになるまで、ビールはもっとも一般的な飲み物であった」<sup>4</sup>とされている。すなわち、オランダ共和国が成立した1580年代以降、ビール醸造業はもっとも栄えた地場産業の一つであったが、18世紀後半には生産高が急激に減少したのである<sup>5</sup>。

そして、「このような現象が生じた理由は、コーヒーや茶の消費拡大にあったに違いない。ビールには、粗悪で弱いものを除いて、重い消費税が課せられた。コーヒーと茶にかかる税金は比較的軽く、これらの飲み物の価格は、18世紀の大半を通じて急激に下がった。コーヒーは50%、茶は75%下落している」<sup>6</sup>とされ、これにより「18世紀後半になるまで金持ちの道楽であった」<sup>7</sup>コーヒーは奢侈品から嗜好品へと変化を遂げていったことが理解できた。

#### (2) オランダ東インド会社における商品（嗜好品）としてのコーヒーの重要性

1602年に設立された世界初の株式会社とされ、東インド貿易に覇を唱えたオランダ東インド会社の規模と商品内容の変化については、「1680年から1720年代の間に2倍になった。同社は、胡椒・香料といった従来型の輸入品のほか、市場が拡大するキャラコ、絹、陶器、コーヒー、砂糖、茶といった商品を加えた」<sup>8</sup>とされている。

すなわち、「17世紀末、ヨーロッパとアジア間の貿易や船荷には大きな拡大がみられた。インドからの衣料品、アラビアからの（のちにはジャワからも）コーヒー、そして、中国からの茶がヨーロッパ市場を席卷した」<sup>9</sup>のである。次の図表1はオランダ東イン

---

<sup>3</sup> 山本（2009, 113）。

<sup>4</sup> J. ド・フリース他（2009, 298）。

<sup>5</sup> ビールの生産量はこの時代以前にも増減していたが、1740年代以降に再び急激な減少が進行し、「1784年には、デルフトで醸造されたビールがわずか1万4,000樽になっていた。これは1世紀前の3分の1の水準であった」（J. ド・フリース他 2009, 300）。一方で、「大多数の住民にとって、ワイン（すべてが輸入品）はあまりにも高価であったため、ビールに替わる酒にはなりえなかった（J. ド・フリース他 2009, 301-302）」とされ、対照的な位置づけとなっている。

<sup>6</sup> J. ド・フリース他（2009, 300）。

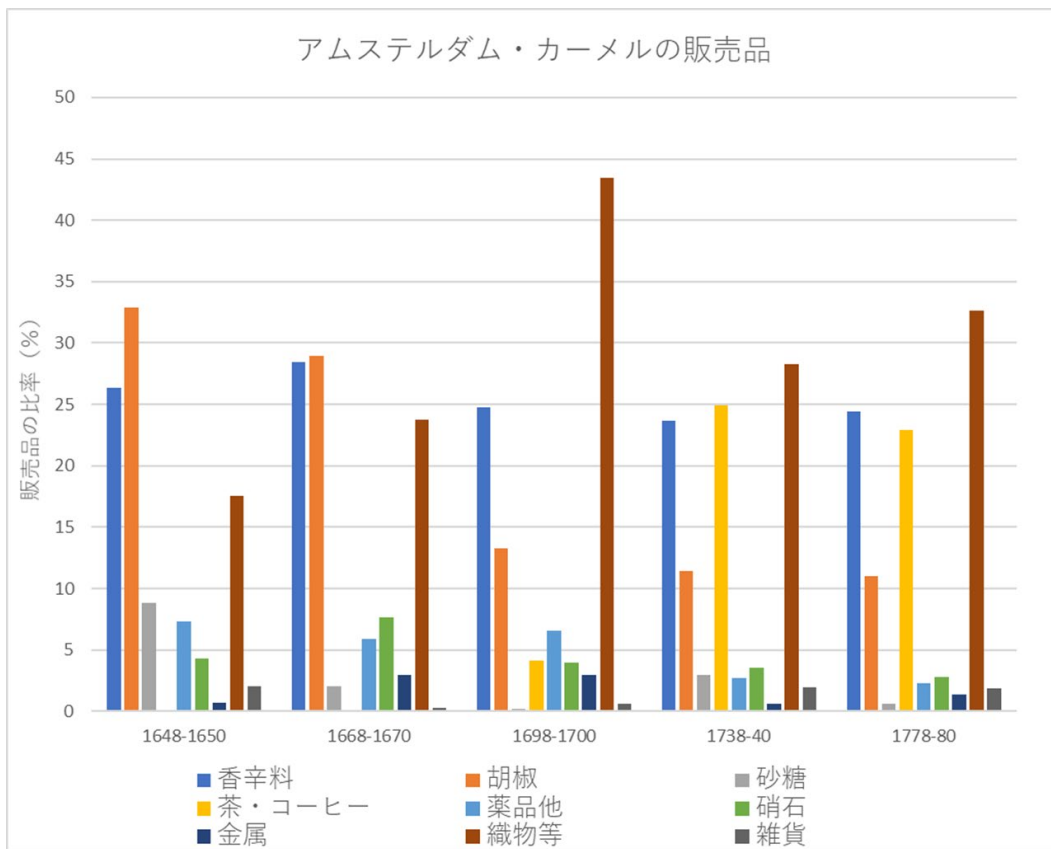
<sup>7</sup> J. ド・フリース他（2009, 301）。

<sup>8</sup> J. ド・フリース他（2009, 639）。

<sup>9</sup> Nationaal Archief（1992, 15）。オランダ東インド会社の貿易の概略については、科野

ド会社における取扱商品の構成比の変化を表したものである。

図表 1：オランダ東インド会社における取扱商品の変遷



	輸入品名	1648-50	1668-70	1698-70	1738-40	1778-80
1	香辛料	26.36	28.43	24.78	23.63	24.43
2	胡椒	32.89	28.99	13.31	11.43	11.03
3	砂糖	8.8	2.02	0.2	3	0.61
4	茶・コーヒー	-	0.03	4.1	24.92	22.92
5	薬品・染料その他	7.35	5.86	6.57	2.7	2.29
6	硝石	4.3	7.63	4	3.54	2.79
7	金属類	0.7	2.99	2.94	0.58	1.37
8	繊維・絹・綿その他	17.54	23.77	43.45	28.27	32.66
9	雑貨	2.06	0.28	0.65	1.93	1.9
	合計 (%)	100	100	100	100	100

(出所：Glamaan1981, Table 2 をもとに作成)

ここからは、17世紀前半にオランダ東インド会社におけるもっとも重要な商品であった胡椒の輸入割合が、17世紀後半にはその他の香辛料に追い抜かれ、さらに後発の産品であるコーヒーや茶が大きくその割合を伸ばすとともに、繊維類が最大の取扱商品となっていることがわかる。同社の取扱品が、奢侈品から嗜好品や日用品へと変化

(1988) を参照。

していったとみることができるのである。

そこで、オランダ東インド会社の本社の文書リストの表題からコーヒー（koffie）を検索したが、次の2点のみを見出すことができた。

- ▶ 6996 : Plakkaten van gouverneur-generaal en raden betreffende de clandestiene verkoop, opkoop en vervoer van koffiebonen, 1723, 1763  
「コーヒー豆の密売, 仕入, および, 輸送に関する総督および評議会からの指示書」
- ▶ 13374 : Verkoopboek van Bourbonse koffie, 1794  
「ブルボンコーヒーの売上帳」

前者は、17世紀に入ってコーヒーの貿易が、オランダ東インド会社の上層部にとっても重要な関心事になっていることを示したものである。また、先駆会社の後継形態として同社内に存在した6つのカーメル（Kamer）一つであるゼーラントカーメルにおけるコーヒーの販売取引の明細簿である。本社側では、詳細な資料検索をすれば、これ以外に表題としては上がっていないものの、勘定科目や取扱商品としてコーヒーが存在することは間違いないが、本研究ではそこまでの検討には至っていない。コーヒーの同社における位置づけの変遷を解明するには、今後のさらなる史料発掘が鍵となる。

一方、同時代（以降の）わが国におけるコーヒーの伝来とその位置づけはいかなるものだったのであろうか。18世紀に長崎出島商館に医師として滞在したシーボルト（P. F. B. von Siebold）は当時の日本人とコーヒーの関係について以下のように述べている。

「日本人は温かき飲料のみを用い、高裁的な会合生活を好むに拘わらず、しかも、200年以上もの世界の珈琲商人（オランダ人）と交通しながら珈琲がまだ日本の飲料となっていないのには実に驚いたことである。」<sup>10</sup>

このように、19世紀に至っても、日本人、なかでもオランダ東インド会社のわが国における拠点であり、それゆえもっとも西洋と接する機会が多かった長崎においてさえも、コーヒーがまったく普及していなかったことが見て取れるのである。

また、同社の長崎出島商館における18世紀の元帳勘定のインデックスを調査しても、コーヒー勘定を見出すことはできないのであり、少なくとも同社の正式な貿易品（本方荷）としては取り扱われておらず、商館員の私貿易（脇荷）として輸入され、商館関

---

<sup>10</sup> 奥山（2022, 64）。オランダ東インド会社やアムステルダム商人とコーヒーの出会いについては、且部（2017, 第3章）を参照。

係者の間だけで愛飲されていたと考えられる。

### (3) 会計史的観点から見たコーヒー：オランダ簿記書の検討

そこで次に、本研究の中間報告的成果として本研究助成による研究成果の一部であることを明記の上で公表した橋本(2022)を再構成して、オランダの17世紀から19世紀までの簿記書における商品勘定の変遷を概観し、オランダ簿記書における商品勘定、とくにコーヒー勘定について、その会計史的意義を述べたい。

まず、会計史上において商品勘定の変遷については、ヴェネツィア式簿記における特定商品勘定(口別商品勘定)の使用が典型的なように、それぞれの時代・地域の商業の実相を反映し、また、その地で活動した商人や金融業者たちの記録計算上の要請にこたえる形で変化してきたとみられている。

また、ヴェネツィア式簿記の特徴である商品別や仕向け地別の特定商品勘定の使用は、「その後の経済発展に伴う商取引活動の規模の拡大やその継続化、あるいは、取扱商品の専門化といった経営環境の変化のもとで、記帳計算業務をかえって煩雑で複雑なものとし、さらに、元帳を通じて企業活動の全体的把握を困難なものとしていったに違いない」<sup>11</sup>と、商品勘定の総括化が経済発展、および、商取引の規模の拡大などから生起する、記録計算上の要求に対応するための変革であったことが指摘されているのである。

そこで、このような観点からオランダの簿記書を検討した場合、オランダ東インド会社が発生した17世紀前半のオランダ簿記書として、十進法による小数の発見でも有名な数学者 Simon Stevin による Stevin (1607) では、取引の例示として丁子、堅果、胡椒、生姜などの特定商品勘定を使用しており、これは当時の貿易の内容を反映したものであった<sup>12</sup>。

また、17世紀後半のいくつかの簿記書に目を向けると、たとえば Waningen (1672) では、緞子(Damasten)、木綿(Lijnwaet)、タフタ織(Taffen)などの織物の勘定が、また、Stevin 簿記書とともにこの時代を代表する簿記書とされる Van Gezel (1681) では、具体的な記帳例示はごく少数ではあるものの、元帳の項目としてライ麦(Regge)や羅紗(Lakenen)といった勘定が例示されており、これらの簿記書からは、いまだ特定商品勘定の使用が一般的であったことが推測できる。

しかしながら、18世紀半ばになると商品勘定の総括化が進行していたようである。たとえば、Förtsch (1765) では次のような仕訳がみられる。

---

<sup>11</sup> 中野(1992, 264)。

<sup>12</sup> これについては、橋本(2008)第4章を参照。なお、Stevinはvershyeden prtien 諸口の使用など、記帳の効率化を行って来ている。

図表 2 : Förtsch (1765) の仕訳帳における商品勘定記入例

		15 Dito		
	Diverse Goederen aan Cassa f. 370 : 17 :-			
3.	voor 6 Baaltijes Coffy, op heeden van Jan de Wit			
1.	gekogt en daarvoor aan bataald	f. 370	17	-

		同 (3月) 15日		
	諸商品は現金に借方。 f. 370 : 17 :-			
3.	ヤン・デ・ヴィットから仕入れたコーヒー 6 梱 (大袋, 俵)			
1.	とそのため支払い	f. 370	17	-

(出所 : Förtsch 1765, Journaal, fol.3 もとに作成)

なお、元帳を確認すると資産としては、家屋や家具、銀行、ほとんどが債権・債務の勘定であり、商品については、この諸商品 (Diverse Goederen) 勘定に集約されており、その明細には、胡椒、藍、カカオ、コーヒー、ワイン、ライ麦、砂糖、パン、リネンなどが含まれている。ここにきて、コーヒーやワインが登場したことは、図表 1 で見た同社の取り扱い貿易品の変化の反映とみてよかろう。つまり、17 世紀に主要産品かつ高級品とされてきた胡椒も、18 世紀にはその他の日用品とともに諸商品勘定で集約されていることが確認できるのである<sup>13</sup>。その一方で、Förtsch が示した元帳の例の中では、

<sup>13</sup> この他の勘定としては、資本勘定、持分勘定 (Part)、そして、損益勘定など基本的な勘定の他に、銀行勘定 (Banco)、プレミア勘定 (L'Agio) があり、当時の社会経済的背景を反映したものとみることができよう。なお、この商品勘定の総括化はどのように評価されるべきかについて、同時代のイギリス簿記書の変革と比較してその意義を確認しておきたい。たとえば、同時代のイギリスの簿記書の変革について、中野 (1992, 265) では、次のように整理ができるとされている。

- ① Alexander Malcom の *New Treatise of Bookkeeping* (1731) によって商用取扱商品の種類別に設けられた総括的な商品勘定が「概括勘定」(General Accounts) と呼ばれるとともに、種類別の総括化の方途がより明確に提示されるようになった。
- ② さらに産業革命による商業の大規模化という社会経済的背景の大変革を受けて、現実の会計実務の直接的適用可能性ないし実践性を念頭において出版された Benjamin Booth の *Complete-System of Book-keeping* (1789) において、取扱商品のすべてを一括して単一の「商品勘定」(Merchandise Account) で処理する方法が説かれるに至りに、この一般商品勘定は、19 世紀の間に一般的な実務として受け入れられるようになった。



ロンドンへ（から）の航海勘定が設定されるなど、いまだ従来からの仕向地別の処理が確認でき、一般商品勘定への完全な移行には至っていないものとみることができるのである。

このように、オランダ東インド会社においては、取引商品は時代とともに変化を遂げていたのであり、これに並行して簿記書においても、Stevin（1607）では、胡椒や香辛料勘定が商品勘定の中心であったものが、Waningen や van Gezel の簿記書になると織物や繊維類へと変化した。さらに、Förtsch の簿記書では、さらに多様な商品が取り扱われているものの、総括的な勘定で処理されており、これらの変革は前述のような社会経済的背景の変化に即していることが理解できるのである。

すなわち、ここまでの考察から、オランダ東インド会社における取扱商品の変化とともに、簿記書における商品勘定もまたその種類に変化が生じ、胡椒など、かつての主要商品の重要性が低下することに対応して、商品勘定の総括化が進んでいたことが理解できた。

そこで、本節ではオランダ東インド会社解散後の 19 世紀の簿記書における商品勘定の処理を検討する。取り上げる文献は、19 世紀に広く読まれたとされる Oudshoff(1833) である<sup>14</sup>。

Oudshoff（1833）では、勘定についてまず、主勘定（Hoofdreckningen）それらをさらに細分化した下位勘定（Toevalligereckningen）に分類されるとする。これを図示すれば以下のようなになる。

---

<sup>14</sup> Oudshoff(1833) の会計史上における位置づけとその重要性については、橋本(2017)を参照されたい。ここでは、その資本勘定について検討が行われている。

図表 3 : Oudshoff (1833) における勘定分類

主勘定	下位勘定
1. 現金	この勘定は細分化できないものである。
2. 商品勘定	A. 特定の項目に関する商品勘定
	B. 自己の取引で外国から輸入した商品
	C. 自己の取引で外国に輸出した商品
	D 1. 他者に対する委託品, あるいは, 委託取引で発送した商品
	D 2. 他者からの委託品, あるいは, 委託取引で受け取った商品
	E. 会社の商品
3. 買掛金勘定 4. 売掛金勘定	F. 手形勘定
	G. 割引勘定
	H. 借入金勘定
	I. 冒険貸借勘定
	K. 抵当勘定
	L. 経費勘定
	M. 家計費勘定
5. 損益勘定	N. 保険勘定
	O. 手数料勘定
	P. 利息勘定

(出所 : Oudshoff 1833, 13-14 をもとに作成) <sup>15</sup>

ここでは「A. 特定の項目に関する商品勘定」を中心に見ていきたい。Oudshoff は、「しかし、勘定を開設するに際して、一般商品勘定 (algemeene Goederekening) に代えて、われわれが仕入れたり販売したりする特定の項目、すなわち、コーヒー、砂糖、タバコ、茶などを選んだ場合、そのような勘定には恣意性が生じるので、適切な方法によって非公式の一般的な勘定に分類しなければならない」(Oudshoff 1833, 20) としており、一般商品勘定と特定商品勘定を並行的に条件付きで使用することを認めている。次の (図表 4) は商品勘定を使用した具体的な記帳例である。

<sup>15</sup> 商品勘定のうち、「E. 会社の商品」とは、「不動産、および、動産、あるいは、ある人の資産の持分であり、例としては、家屋、土地、船舶、証券、家具などがあり、これらは、商品 (Goederen) の項目のもとに収容されうるものである。しかし、その他すべての商人の資産は、資本 (Kapitaal) の名のもとにそれぞれ管理されるであろう」(Oudshoff 1833, 14 脚注) とされている。また、この他、「I. 冒険貸借勘定 (Bodemarij-rekening)」とは一種の海上保険であり、これについては、志津田 (1988) を参照。

図表 4 : Oudshoff (1833) の仕訳帳記載例

		3 dito.			
4	GOEDEREDEN-REKENIG AAN PITER BERT f 1473,60				
6	Voor deverse Goederen van hem gekocht			1473	60
		5 dito.			
2	DIVERSEN AAN GOEDEREN-REKENING f 1544,65 Voor				
	diverse Goederenaan de onderstaande verkocht, als:				
6	JOHANNES KLEIN	1250	40		
4	DIRK NEEMER	294	25	1544	65

		3 日			
4	商品勘定はPITER BERTに借方 f 1473,60				
6	諸商品を彼から仕入れた。			1473	60
		5 日			
2	諸口は商品勘定に借方 f 1544,65				
	諸商品を以下の人々に販売した。				
6	JOHANNES KLEIN	1250	40		
4	DIRK NEEMER	294	25	1544	65

(出所 : Oudshoff 1833, 129 をもとに作成)

これを現代風の仕訳で示せば次のようになる。

3 日 (借方) 商品勘定 1,473.60 (貸方) P.Bert 1,473.60

5 日 (借方) 諸 口 1,544.65 (貸方) 商品勘定 1,544.65

この例示から、仕訳帳において商品勘定が複数の個別商品を集約し総括化されていることがわかる。そこで、次に (図表 5) の元帳への転記の例示を示す。

図表 5 : Oudshoff (1833) における元帳「商品勘定」記入例

借方		商品勘定 (GOEDEREN-REKENING)				貸方					
1829年	日	(相手勘定)	(商品内容)	元丁	(金額)	1829年	日	(相手勘定)	(商品内容)	元丁	(金額)
10月	3	P. Bert	諸商品	6	f 1473 60	10月	5	諸口	諸商品	-	f 1544 65
"	6	J. Klein	薬種類 4 バレル (樽)	3	- 1865 50	"	8	J. Rae z/r	薬種類 4 バレル	6	- 1865 50
"	9	H. Alleman	コーヒー 3 バレル	8	- 975 75	"	18	F. Wiltens	コーヒー 3 バレル	9	- 1050 70
"	19	J. Klein	茜染料 4 バレル	3	- 1224 06	"	20	Ph. Graum z/r	茜染料 4 バレル	9	- 1224 06
"	23	同上	同 10バレル	"	- 3542 60	"	24	P. le Brun z/r	同 10バレル	12	- 3542 60
"	24	現金	ブランデー 6箱	2	- 1035 90	"	25	諸口	硝石 180個	-	- 3814 95
"	26	諸口	硝石 180個 (俵、大袋) からの総売上	-	- 3814 95	"	26	諸口	ブランデー 6箱	-	- 1155 55
"	27	現金	諸商品	2	- 3550 65	"	29	G. Hill委託商品	ロンドンに向けて発送された(委託販売の) 諸商品	14	- 3550 65
"	28	同上	ジュネバー (オランダジン) 6箱	"	- 1050 50	"	30	諸口	ロンドンに向けて発送されたジュネバー 6箱	-	- 1050 50
11月	3	H. Alleman	諸商品	8	- 2860 45	11月	4	J. Rae委託商品	ロンドンに向けて発送された(委託販売の) 諸商品	15	- 2860 45
"	27	J. Hoevenaar	同上	13	- 1498 60	"	28	西インド会社向け商品	西インド会社に向けた発送された諸商品	16	- 1498 60
12月	8	J. de Jager	コーヒー 6バレル	"	- 1668 75	12月	31	新勘定へ	支出を伴ったコーヒー 6バレル	4	- 1689 75
"	31	経費勘定	諸商品に関する支出	5	- 65 75						
"	"	損益	この勘定に関する利益	18	- 220 90						
					f 24847 96						f 24847 96

(出所：Oudshoff 1833, 176-177 をもとに作成)

このように、薬種類、コーヒー、茜染料、ジュネバー、ブランデー、硝石などが主要な商品になり、胡椒など香辛料はまったく姿を消していることがわかる。なお、主要商品については、数量や販売方法、および、仕向地など明細が記載されるものの、前述のような諸商品はその内容は記載されないのである。また、損益は期末に一括して計上し損益勘定に振替えられているのである。

ここまでの検討の結果、オランダ簿記書においても Oudshoff (1833) に至り、商品勘定の総括化が進み、特定商品勘定から一般商品勘定へ完全に移行し、取扱商品も香辛料や衣料品から日用品、とくに食料に移行していることがわかり、これも当時の商取引の変化の反映とみることができるのである。

このように簿記書で例示される取扱商品名は、17世紀から19世紀にかけて非常に大きな変化を遂げた。17世紀オランダの黄金時代の源泉であった香辛料、なかでも胡椒は、簿記書における例示から姿を消し、内訳にも記載されないほど重要性の乏しいものとして、他の商品とともに一般商品勘定の中に埋没したのである<sup>16</sup>。このことは、

<sup>16</sup> この理由としてはオランダ経済が貿易ではなく国内の商品流通に支えられていたという側面もあるかもしれない。すなわち、近世オランダの経済成長を対外的な貿易ではなく、内向的な物的・人的制限の効率的な配分に求める見解が強まってきている。このような観点から、アムステルダムの商品専門商の成長過程を分析したものとして杉浦(2004)を参照。ここでは、様々な商品を扱う専門商がこの地に集まり経済の発展を担い、それはイギリスとは異なったものであったとされる。

簿記書が当時の社会経済の実相の一部を反映しているとみてよいと思われる。

#### 4. 考察

ここではこれまでの検討の内容を集約することにより考察に代えたい。本研究では、オランダやイギリスにおける資料（史料）の収集を前提としていたが、コロナ禍のためにその実施が研究期間の最終盤になったことから、文献研究やオンラインで入手可能な資料をもとに研究を進め、以下の知見を得た。

- ① オランダ東インド会社の取扱商品が、17世紀前半におけるもっとも重要な商品であった胡椒から、早くも17世紀後半にはその他の香辛料に追い抜かれ、さらに後発の商品であるコーヒーや茶が大きくその割合を伸ばすとともに、繊維類が最大の取扱商品となるなど、同社の取扱商品が、奢侈品から嗜好品や日用品へと変化していった。
- ② もっとも栄えた地場産業の一つであったビール醸造業は、18世紀後半には重い消費税率のために生産高が急激に減少し、その一方で税率の低かったコーヒーと茶の価格は急落したため、コーヒーは奢侈品から嗜好品へと変化を遂げていった。
- ③ 社会経済的背景の変化とともに、そこに生起する記録計算上の要請を反映する簿記書においても、例示される商品勘定は、胡椒などの奢侈品から、コーヒーなど嗜好品へと移行し、18世紀の簿記書では胡椒などに完全に取って代わった。

このように、現実のオランダ経済において、貿易における取扱商品が胡椒や香辛料からコーヒーなどに変化し、さらにコーヒー自体が高価な奢侈品であった嗜好品へと位置づけを変え貿易上の重要性を増していくとともに、簿記書においてもコーヒーは、重要な位置を占めることとなったといえる。

#### 5. 結論（今後の課題と展望）

本研究では、オランダ東インド会社による嗜好品貿易がどのような規模で行われ、当時の社会・経済にどのような影響を与えたのかについて、会計学的一次史料の精査を通して、その実態を実証的に明らかにするとともに、中間報告会における審議員からの指摘事項にあった「会計帳簿資料を基に嗜好品の位置付けを明らかにする」ことを目的としてきた。

この目的に対しては、コロナ禍のためオランダなど現地への渡航が、研究期間の最終盤までずれ込んだことなどにより、研究計画の修正を余儀なくされたが、オンラインで入手できた史料や収集した文献をもとにできうる限りの研究を進めてきたところである。

その結果、当初、奢侈品であったコーヒーが輸入の拡大と税制の優遇もあって、オランダ人にとってビールに替わる嗜好品としての地位を固めることができた確認した。これを、会計史的観点から位置づければ、より合理的な会計処理法として、中世以来のヴェネツィア式簿記の特徴の一つをなす特定商品勘定から、近代的な一般商品勘定へと商品勘定の総括化が時代とともに進む中において、コーヒー勘定などについては、一般商品勘定と特定商品勘定を並行的に条件付きで使用することを認めていることは、それだけこの商品に重要性があり、またそれを例外的に記帳することに意義があったことを示していると考えられるのである。

このことは、会計史的にみて、その記録の対象が奢侈品からコーヒーなどの嗜好品へと移ったことを意味し、帳簿記録が、主として一部の特権階級が享受する奢侈品を記録するものではなく、一般大衆が日常生活において楽しむための嗜好品を記録するものに変化したという意味において、それを会計資料の大衆化と呼ぶことも可能かもしれない<sup>17</sup>。

しかしながら、このことは仮説にすぎず、これを証明するためには、今回、十分に検討することができなかつたワインなどその他の重要な嗜好品についても、一次史料を基に比較検討することが必須であり、これが本研究テーマの今後の課題となる。

## 6. 参考文献

奥山儀八郎『日本の珈琲』、講談社学術文庫、2022。

小野塚知二「会計は何を表現できるのか、何を勘定すべきなのか」『会計理論学会年報』、2020、34号、19-29。

小林 盾（編）『嗜好品の社会学 ―統計とインタビューからのアプローチ―』、東京大学出版会、2020。

志津田一彦「冒険貸借・積荷冒険貸借と船舶先取特権の一考察：特にイギリス法の場合」『富大経済論集』、1988、34巻1号、143-175。

科野孝蔵『オランダ東インド会社の歴史』、同文館出版、1988。

杉浦未樹「アムステルダムにおける商品別専門商の成長 1580～1750年―近世オランダの流通構造の一断面」『社会経済史学』、2004、70巻1号、49-70頁。

且部幸博『コーヒーの世界史』、講談社現代新書、2017。

中野常男『会計理論生成史』、中央経済社、1992。

橋本武久『ネーデルラント簿記史論―Simon Stevin 簿記論研究―』、同文館出版、2008。

---

<sup>17</sup> この点については、J・ド・フリース（2021）における議論が参考になると思われるが、これも今後の課題である。また、Morren（1896）などのように、コーヒー商人に特化した簿記書が現れてきたことも注目すべきであろう。

——— 「19 世紀オランダ簿記書における資本勘定」『會計』, 2017, 192 卷 5 号, 43-52。

——— 「オランダ簿記書における商品勘定に変遷過程」『會計』, 2022, 202 卷 5 号, 1-11。

J・ド・フリース/A・ファン・デア・ワウデ著, 大西吉之・杉浦未樹訳『最初の近代経済-オランダ経済の成功・失敗と持続力 1500-1815-』, 名古屋大学出版会, 2009。

J・ド・フリース著, 吉田敦・東風谷太一訳『勤勉革命: 資本主義を生んだ 17 世紀の消費行動』, 筑摩書房, 2021。

茂木虎雄『近代会計成立史論』, 未来社, 1969。

山本大丙「書評: J. ド・フリース/A・ファン・デア・ワウデ著, 大西吉之・杉浦未樹訳『最初の近代経済-オランダ経済の成功・失敗と持続力 1500-1815-』」『史学雑誌』, 2009, 118 卷 12 号, 113-114。

Förtsch, M.F. *Instructie of Grondige Onderregting over het Italiaans Boekhouden*, Amsterdam, 1765.

Gazel, W. *van Kort Begryp van 't Beshouwig Onderwijs in 'tKoopmans Boekhouden*, Amsterdam, 1681.

Glamaan, K. *Dutch-Asiantic Trade: 1620-1740*, Den Haag, 1981.

Kort, de J.P (1984) *De Jaarlijkse Financiële Verantwoording in de VOC*, Leiden.

Morren, F. W. *De Boekhouding eener Koffieonderneming*, Amsterdam, 1896.

Nationaal Archief, *VOC (Versie: 4-11-2022)*, Den Haag, 1992.

Oudshoff, W. *Volledig Theoretisch en Praktisch Handboek voor het Italiaansch of Koopmans Boekhouden*, Rotterdam, 1833.

Stevin, S. *Vorstelicke Bouckhouding op de Italiaensche wyse*, Leiden, 1607.

Waningen, H. *'t Recht gebruyck van 't Italiaens Boek-houden*, Amsterdam, 1672.

※ Förtsch, van Gazel, Oudshoff, Stevin, Waningen の著書は, 雄松堂 (現・丸善雄松堂) による Historic Accounting Literature 所収の復刻版を使用した。

(一次資料)

NL-HaNA, Inventaris van het archief van de Verenigde Oost-Indische Compagnie, 1602-1795 (1811), 1.04.02.

NL-HaNA, Nederlandse Factorij Japan, 1.04.21, inv.nr. 829-974(Journalen), 975-1120(Grootboeken).

## 謝辞

本研究は、2021年度1年間の予定であったが、コロナ禍により研究計画が遂行できなくなったため、1年間の延長を申請し、これを認め研究を継続させていただいた貴財団と関係者の皆様に感謝申し上げたい。また、中間報告において貴重な助言をいただいた小野塚知二審議員はじめ各審議委員にも謝意を表す。同様に本研究助成による渡航を断念したものの、常に貴重なアドバイスをいただいた共同研究者野澤丈二氏に感謝申し上げる。もとより、本報告書における誤謬や誤解はすべて、筆者の責に帰するものである。



## 7. 英文アブストラクト

An Accounting-Historical Study of Coffee Culture in the Netherlands

-Why were coffee chosen? -

Takehisa HASHIMOTO (Kyoto Sangyo University)

The purpose of this study is to empirically clarify the scale of the Dutch East India Company's trade in luxury goods and its impact on the society and economy of the time through a close examination of primary historical accounting documents.

Therefore, this study will be conducted in the following order.

- (1) Collection of previous research results (papers, etc.) in peripheral fields such as cultural history and trade history.
- (2) Creation of a database of all previous studies on coffee and examination of its contents.
- (3) Collection of additional materials necessary to conduct the research.
- (4) Review of the research topic based on the additional materials.
- (5) Prepare a report on the results of the study and present the conclusions and future prospects of the study.

In conclusion, it can be pointed out that the commodities handled by the Dutch East India Company shifted from luxuries to daily necessities, such as coffee from pepper, and furthermore that coffee shifted from a luxury item to daily consumables due to the sharp decline in coffee prices in the late 18th century.

In addition, this study shows that the commodity accounts in bookkeeping shifted from luxuries such as pepper to luxury goods such as coffee, and coffee finally became a representative commodity in 18th-century bookkeeping.